

知覚における驚きの体験が自己と他者の客観性評価に与える影響

山崎 竣介

私たちは日常生活の様々な場面において、意見の対立に遭遇することがある。人は、そのような意見の対立の際、自身とは異なる意見を「バイアスがかかった意見だ」と感じる傾向があることが報告されている (Kennedy & Pronin, 2008)。また、そのような意見を持っている人物のこと自体を「バイアスがかかった人だ」と感じる傾向があることも報告されている (Reeder et al., 2005)。人がそのように考えてしまう原因として、ナイブ・リアリズム理論 (Ross & Ward, 1995) では、「私は物理的事物や出来事について、客観的事実をありのままに受け止めている」という信念を人が抱いているからだという理由を挙げている。神原 (2021) は、自分の知覚が必ずしも外界の正しい反映ではないことに気づかせる刺激として、錯視を用いた実験を行い、錯視を見ることで、自身とは態度が異なる他者を「バイアスがかかった人だ」とみなす傾向が軽減されることを報告している。本研究では、この知見を追試・拡張するために、2 つのオンライン実験を行った。

実験 1 では、神原 (2021) の実験を十分なサンプルサイズのもとで追試した ($N = 169$)。錯視画像を見ることによって、自身とは態度が異なる他者への判断が変わるか、自己と他者の客観性評価にどのような影響を与えるかについて検討した。錯視画像を見ることで、①態度の相違による他者の判断への過度なバイアス認知が軽減され、②自己の客観性評価が低くなり、③自身とは意見が異なる他者の客観性評価が高くなるという仮説を立てた。実験群には錯視画像を、統制群には統制画像を見せ、その後、日常で人がよく示すバイアス 7 項目と性格特性 5 項目からなる質問紙を、自身と意見が同じ他者／自身と意見が異なる他者のどちらかについて回答してもらい、その後同じ質問紙を自分自身についても回答してもらった。その結果、どちらの群でも、自身と意見が異なる他者は、意見が同じ他者に比べてより客観的でなく、よりバイアスがかかっていると評価された。しかし、その傾向は錯視を見た群でも見ない群でも変化せず、錯視を見ることによりバイアスが軽減される効果は認められなかった。また、自己と他者の客観性評価も群間での有意差が見られず、錯視を見ることの効果は認められなかった。そのような結果になったのは、実験参加者が錯視画像を見ても驚かなかったことが原因の 1 つとして考えられる。

そこで実験 2 では、驚きをもたらす刺激として知られている変化盲 (Jensen et al., 2011) を用いた実験を行った ($N = 199$)。変化盲を体験して驚きの程度が大きかった人は、①自身と意見が同じ他者をより客観的でないと感じるようになり、②自身とは意見が異なる他者をより客観的であると感じるようになり、③自分自身をより客観的でないと感じるようになるという仮説を立てた。客観性を評価する 4 項目からなる質問紙を、平山・楠見 (2004) の批判的思考態度尺度を参考にして作成した。まず、自身と意見が同じ他者、自身とは意見が異なる他者、自分自身の 3 者についてその客観性を回答してもらった。次に、変化盲刺激を見てもらい、それを見てどの程度驚いたかを尋ねた。最後に、もう一度 3 者について同じ質問紙に回答してもらった。相関分析の結果、変化盲を体験して驚きの程度が大きかった人は、刺激を見る前よりも見た後に、自身とは意見が異なる他者をより客観的であると感じるようになり、自身と意見が同じ他者や自分自身をより客観的でないと感じる傾向が認められた。

このことから、実験参加者が自身の知覚の正確さを疑うきっかけとなる十分な驚きを経験すると、自身とは意見が異なる他者を客観的でないと感じる傾向や、自分自身を客観的であると感じる傾向が軽減されることが示唆された。(基礎心理学)